

## 十一、「草で草を制する企て」

如何に呑気なごんべえでも、闇雲に百姓みならいを始めた訳ではない。多少は、書物も読み、インターネットで調べもする。

昨年（二〇〇六年）の三月、百姓を始めようと決めた時、何冊かの書物を買った。その中の一冊にこんなのがあった。西村和雄先生著『スローでたのしい有機農業コツの科学』という本である。もともとこの本の初版本は『ぐうたら農法のすすめ』という題名であったと、本の「はじめ」に先生が書いていらっしやる。まさに、ごんべえに打って付けではないか。書店でこの部分を読んで「これだ！」と、すぐに買った。読み進んでいくうちに、ちつとも「ぐうたら」ではないことに気が付いたがもう遅かった。丁寧に読んだので、折り目が付いていて、返品もできない状態である。仕方がないから、傍線など引きながら、もつと丁寧に読んでやった。

知識もなく、やったこともない事を想像しながら読むのだから、なかなか理解できないし、記憶することもままならない。時には、ごんべえには到底出来そうもないことが書いてある。そうはいつても、ここで引き下がる訳にもいかない。何はともあれ、書いてあることの一部でもいいから、その通りでなくてもいいから、まずはやってみることにした。少々のことにはたじろいでいては、百姓は出来ないし、前にも進まない。やっぱり、これはヒントだと思うことが書いてあった。肥沃な土をつくるのに、牧草を緑肥作物として利

用する方法である。これを上手くやれば、休耕田（耕作放棄地）に生えている雑草を、牧草で抑える事が出来る。さらには、緑肥としても利用できるのではないかとということだ。

幸いと言うか、困っていると言うか、お休みしている田圃や畑がごまんとある。何年も雑草を育てている休耕田・畑（耕作放棄地）である。ついでに、稲や野菜を好物とする虫たちも育てている。虫たちは、隣接している田畑に集団でワーツとやってくる。やってきては、作物をワサワサと食べたり、若い実の汁を吸ったり、子孫を増やしたりしている。虫たちのメンバーの中でも、カメムシなどはその最たるものだ。刺激すると異なる臭いを発するので、一メートル離れていてもすぐに判る。

さらには、生い茂った草の中で、子育てに都合が良いのだろうか、イノシシの親子が夜な夜な遊びに来る。草が土俵のように丸く倒れた跡を朝の見回りで発見する。狸道（獣道）もできている。狸は、昼間でもよく見かける。出会うと、一時歩みを止め、こちらをチラッと見て、後はスタスタとマイペースで立ち去っていく。テレビなどで時々紹介される子連れ一家の狸は、まだ見かけたことがない。

田圃でも畑でも、耕作を放棄して一年もすると、一メートル位の高さまで雑草が伸びる。放っておくと、葛が蔓延り茅が生えてくる。さらに放っておくと、木が生える。こうなったら、もう駄目だ。ブルドーザーかコンボでガーとなぎ倒し、根っ子を掘り返し、地ならしをすれば何とかなるかも知れないが、少々の人手を掛けたくらいでは、元に戻せない。チェーンソーで木を切り、草刈機やトラクターだけで、土作りまでやると、何年も掛かるだろう。そんなに、時間を掛けているほど暇ではない。

ごんべえが取り組んだのは、悪くても木が生えかかっている程度止まりの田畑で、草刈機と、トラクターか耕運機で何とかかなりそうな所だ。ざっと見て、元田圃が二〇アール、元畑が一〇アールある。取り掛かったのは、昨年五月頃である。雑草だけのところ、雑草と葛が生えているところ、雑草と葛と茅が生えているところ、雑草と葛と茅と木が生えているところなど、さまざまで、こりや遣り甲斐があると思った。俄然闘志が湧いてきた。

それぞれ田畑の荒れ具合が違う。同じやり方の整地では駄目で、また同じ種類の牧草では上手くいかないであろうと思った。そこで、六種類の牧草の種を買って来た。種蒔の時期は、それぞれ異なるが、何はともあれ、まず種を準備したのだ。種類は、西村先生の本を見て決めた。

種を蒔くには、まず、雑草や木を片付けなければならない。どうなるか分からないが、なあくにも考えずに、とにかく草刈機でガンガン草を刈った。草が伸びては刈り、伸びては刈ったのだ。それでも草は負けてはいない。よおし、それなら根こそぎだと、耕運機を出してきた（トラクターだと小回りがきかないし、斜面の畑があつて運転が怖い。ごんべえ、まだ運転が下手なのである）。耕運機の爪を深くし、スピードをゆるめ、同じところを二、三回耕した。根つ子をやられた草は、五、六月の陽の光に乾燥させられ、やっつくたびれてきたようだ。

六月（二〇〇六年）中旬になった。買って来た六種類の種の内、シロクローバーとアカクローバー、レンゲは、いくら「みならい」と雖も、今蒔く時期でないことくらいは分かる。残ったギニアグラス、ヘアリーベッチ、燕麦の種を五アール位の元田圃に蒔いた。これも適した時期とは言えないが、実験するつもりで蒔いた。またもや雑草を育てるよりは、ましであろう。なにしろ、雑草と言う奴は、隙あらば芽を出し、伸び上がり、自分の勢力範囲を広げようと狙っているのだから。

雑草を押しつけ順調に育ったのは、ギニアグラスであった。ぐんぐん伸びてきたので、一度刈り取って、今も畑をしている場所に敷き詰めた。この場所でも雑草を押しつけようと考えたのだ。大抵の植物は、光がなければ育たない。土まで光が届かないようにしてやれば、いかに遅い雑草も降参だ。上手くいった。敷き詰めたギニアグラスの間に、作物の苗を植えれば、草対策にもなるし、いずれ肥しにもなる。

刈り取られたギニアグラスの株から、また芽が出てきた。秋になると、草丈は二メートルにもなり、穂が出て実も付いてきた。実験だからこのまま置いておくことにした。冬になって立ち枯れし、やがて雨に打たれ倒れてきた。今（二〇〇七年の三月）は、土の表面を十分に覆っているので、雑草はひよつとして生えてこないのではないだろうか。春になると、実から芽を出すかも知れない。作物を作らないのであれば、耕作放棄地対策としては、ここまでで実験成功である。狭い面積しかやっつけないので、今年はもつと広げてみようと思っっている。

ヘアリーベッチ、燕麦は、夏に弱いようだ。成長が遅いし、雑草に負けてしまった。実験とはいえ、ごんべえのせいで、可愛そうなことをしてしまった。

雑草、雑草と、どうも彼等を小ばかにしているようで、何となく気が引ける。雑草(?)にとつてみれば、

雑草、雑草と一括りに言つて欲しくもないし、小ばかにもして欲しくないだろう。人間様の勝手な言い分だと、思っているかも知れない。ごんべえ、植物学者でもなければ、その道の専門家でもないのだから、よく分らないが、田畑には、季節季節によって違う種類の雑草が生えて来る。まるで雑草のデパートである。それぞれに個性豊かである。

十月になった。秋になった。涼しくなってきた。そろそろ種蒔きの季節である。ヘアリーベッチ、シロクローバー、アカクローバー、レンゲの蒔き時である。燕麦は、ちよつと遅れて十一月である。種袋の能書きにそう書いてあるので、そうだろう。今までに雑草をやっつけてきた田畑には、時々トラクターや耕運機をかけていたので、そんなに雑草は蔓延<sup>はびこ</sup>っていない。上手く蒔けそうである。

ヘアリーベッチを蒔くのは、種まき機「ごんべえ君」の仕事である。彼の出番がきた。単位面積当たりに蒔く量は大体決まっているが、これも「能書き」に書いてある。「ごんべえ君」には、蒔く種の量を調節できる装置が付いている。そうだけれど、例えば一〇アルにこの種をいくら蒔くのだから、調節レバーをこの位置にすればよいということにはなっていない。「ごんべえ君」、汎用性の機械だから、種の大小、大豆からゴマまで、いろいろに対応している。蒔きながら、この辺りでどうだろうか、自分で見当をつけて調節するしかない。いろいろやっているうちに、これでよしというところを見つけた。と思つたら、この時点で蒔きが終わってしまったということがよくある。みならいであるから、これも仕方ないかと自分を慰めているが、どうやらこれからも、こんなことを繰り返そうである。

ヘアリーベッチを蒔いて十日もすると、もう小さな笹状の芽が出てきた。種にしてみれば、当たり前で不思議でも何でもないのだろうが、蒔いた筋に従って、一斉に芽を出したのを眺めると、やはり不思議な思いがする。ここまで出来た、と気分もいい。

ヘアリーベッチは、マメ科の植物でカラスノエンドウの親戚である。親戚といつても、ごく近い親戚で、葉っぱ、茎など、見かけが非常によく似ている。ほとんど兄弟のようである。双子の兄弟といつてもよさそうだ。

十一月が来て、細長くひよろひよろとした、葉っぱの付いた茎が、一五センチ位の長さに雑草の間から伸びてきた。ごんべえが思い描き、「ごんべえ君」が蒔いた通りにである。十二月になると、毎朝の霜にも負けず、さらに成長し、横にも逞しく伸びてきた。一、二月は、ほんの申し訳程度に伸び、それでも雑草よりは蔓延<sup>はびこ</sup>ってきた。

そして三月に入った。この冬は、暖冬だといつたので、そのせいか、急に大きくなってきた。暖冬といつても、今年ほど、毎朝霜が降りてくる年は珍しいと母が言っている。どうやら、この草、寒さには随分強いようである。

三月半ばになった。葉っぱと蔓状の茎で地面が全く見えない。ヘアリーベッチの絨毯が出来上がった。厚さ約三〇センチの浅緑色の絨毯である。ふつかふつかの感じで、寝ころぶと気持ち良さそうだ。こうなると、他の草が生えてくる余地はないように思える。が、しかし、ここで油断してはならない。なにしろ、さ

んざん手を焼いてきた雑草の団体さんを相手にしているのであるから、そう簡単にはいきそうもない予感がある。次から次へと、新手がやって来るのではなからうか。

シロクローバー、アカクローバーは、元畑もとに蒔いた。昨秋・今冬の乾燥で、出掛けた芽が枯れてしまった場所もあるので、今はまばらに生えている。この春の暖かさで、雑草に先駆けて、住まいの範囲を広げている。この分で行くと、雑草に勝つかも知れない。肥料などやると、雑草にも効くので、見守るしかない。アカクローバーは、綺麗な花が咲くに違いないと、今からわくわくしている。

レンゲさんは、まだウンともスンともいわない。どうなっているんだろうか。種を蒔いたところに、何か芽がでているが、レンゲか雑草か分からない。このまま様子を見るしかなさそうだ。今ここで、耕運機をかける訳にもいかないし。隣人にレンゲを蒔いた話をしたら、「そうか、そんなら、蜜蜂を飼わなけりゃあ」と言っていた。蜂蜜は好物である。料理にも使える。またまたやる事が増えた。

十一月、燕麦を蒔いた。他のものに比べると、一番広い面積の元田圃もとに蒔いた。これも「ごんべえ君」の活躍する場面である。今までで、一番上手く蒔けた。芽が出てきたのを見ると、綺麗に筋が出来ている。小学校の生徒が、校庭できちつと並んでいるようだ。時々はみ出しているのは、愛嬌というもんだらう。年末になると、五センチ位に伸びてきた。霜にもやられていない。春になれば、ぐんぐん伸びてくるだろうと思っていたら、まだそんなに伸びていない。三月末頃で、せいぜい二十五センチ位である。なにしろ、初めてであるから、これでいいのかどうか分からない。ヘアリーベッチのように、地面を覆ってしまう程にはな

っていない。その内、雑草が生えてきたら、どうなるのだろうか。燕麦は、麦の類だから、この時期にはもっと大きくなっていないと、ダメだろうと思うんだけど。

「草で草を制する企みたくら」は、まだ道半ばである。後二年くらいやらないと、そこそこ安定したノウハウは、身に付かないだろう。今回のと合わせて、三年位掛かることになる。上手く成功すれば、元田圃もとや畑をいつでも現役に戻す事ができるのだ。

二〇〇七（平成十九）年三月三十日